① 毎月25日発行

山と博物館

第５３巻　第４号　２００８年４月２５日　　市立大町山岳博物館

右：山案内人が面桶（メンパ）の弁当を食べている様子

左：池または沢の水で米を研いでいると思われる様子

2枚とも大正7年（1918年）伊藤孝一撮影（百瀬堯氏蔵）

古き時代の山での食

宮野　典夫

昭和40年代後半、私が所属していた大学山岳部では冬山には「ペミカン」を持って行った。「ペミカン」はみじん切りの野菜や肉をラードで固めたもので、カロリーも高くある程度保存もできたので、冬山に適していた。その後、ドライフーズやインスタント食品が急速に普及し、山で食のメニューが増え、味も格段によくなってきたので、最近は「ペミカン」を作ることはほとんどなくなった。

今年、「ペミカン」作りを思い立った。出来上がりのイメージは浮かんでくるが、分量などはまったく記憶に残っていない。大学時代の友人に尋ねても私と同じであったが、友人が明治大学山岳部の「ペミカン」のレシピを手に入れてくれた。早速、材料をそろえて作ってみた。その臭い、味は大学山岳部の部室でラジウスを使って作った当時の様子を思い出させてくれた。

大町山岳博物館では友の会の会員を中心に構成されている「山岳文化研究会」のメンバーがそれぞれ興味のある山に関することをテーマに掲げ、地道に勉強会を重ねている。この中で山の食を考えたとき、意外と資料が手元にないことに気づかされた。

「山岳文化研究会」の会合の際、インスタントラーメンに「ペミカン」を入れて皆さんに食してもらった。これを機に「山岳文化研究会」の仲間が食に関して記載されている本などを探してきてくれた。これには播隆上人、ウォルター・ウエストンなど近世や明治時代の食べ物が書いてあり、昭和になると大学山岳部の部報や紀行文、随筆などに食に関しての記載が見られるようになる。しかし、当時の山での食を今どのくらい再現できるのだろうか。

（山岳博物館副館長）

キタキチョウの越冬場所について

清水　博文

キタキチョウの越冬を観察する機会を得たので、記録しておきたい。

【記　録】

種名　*Eurema mandarina (del'Orza,1869)*
　　キタキチョウ
観察場所　大町市大町（俵町）
観察年月日　２００８年２月２日～３月18日
観 察 者　清水博文

建物脇の植込みの中で越冬中の個体を観察する機会を得たので、キタキチョウの越冬場所の１例として報告する。

キチョウが越冬していた植込み

越冬場所は、東側にある２階建ての建物の南北に沿って作られた通路脇の植込み部分であった。植込みには園芸品種のサツキ（縦・横各１００cm四方、高さ42cm）が植栽されており、樹木の内部に縦10cm、横10cmほどの空間ができたところに入り込んでいた。地面からの高さは、根際から18cmの高さであった。上方に頭部を向け、触覚はたたんだ翅の間に挟みこむ形であった。

越冬場所は、東側は建物、そのほかの方角は、コンクリート張りの地面であった。建物の屋根は植え込み部分まで覆っていないが、西側からの風が強くない時以外はあまり多く雪が積らない場所である。また、日当たりは10時以降になるとよい条件であった。たとえ積雪があっても、密に生えた枝葉と木の枝の隙間の空間によって越冬個体には直接雪が積ることのない場所であった。

越冬する昆虫は、越冬時に複数個体が狭い範囲内で確認されることもあることから、同場所および周囲にある類似した環境を探してみたが、他の越冬個体を確認することはできなかった。また、観察個体は、複眼の色から生存していると判断した（死亡すると色が黒褐色等に変化することから）。

以下、本観察個体の確認月日である。２００８年２月２日発見、（２月４日降雪）、２月５日確認、３月５日確認３月18日確認したが、３月23日以降は確認することはできなかった（３月31日再度周囲を探したが、いない）。

気象庁による大町市における３月の観測値では、22日の最高気温は18・８℃、日照時間は11・１時間と３月で一番暖かな日であった。早朝の気温は氷点下まで下がるが、日中はとても暖かな日であったことから、観察個体は、この日に越冬場所を離れたのではと推定した。なお、22日は、大町市内の他の場所において２個体のキタキチョウが飛翔しているのを確認している。

文献
福田晴夫・浜栄一・葛谷健・高橋真弓・田中蕃・田中洋・若林守男・渡辺康之１９８１．原色日本産蝶類生態図鑑（Ⅰ）．保育社．

（山岳博物館学芸員）

山小屋の焼印について

清水　隆寿

はじめに

火で熱した金属性の焼きごてを木製品や動物の皮膚に押しつけ、焼き痕をつけて標（しるし）とすること、そしてその道具を総称して焼印と言っています。英語ではbrandと言い、普通、銘柄とか商標とか意訳されていますが、原義は家畜に焼印を押すことによって所有者の目印や個体識別に用いたことをいい、転じて現在では他の商品との差別化を強調する商品ブランドの意味として常用されています。

この焼印を用いて、宗教登山者や一般登山者向けに登頂記念として、山小屋や山頂神社社務所などでは、主に金剛杖に焼印を押すサービスが行われていました。もちろん富士山や御嶽、羽黒山などかつて修験や講が盛んに行われていたところでは、現在も盛んに利用されていますが、北アルプスの山小屋では今ではあまり見かけなくなっています。

焼印が残された金剛杖一例

小稿では、山岳博物館に寄贈された１本の金剛杖から、かつての北アルプス周辺の焼印の歴史について資料紹介を行い、衆目を集め、皆様からのご教示を頂くきっかけとして報告させて頂きます。

資料〈写真１〉は、平成３年に北安曇郡池田

町にお住まいであった宮澤正憲氏（注1）より、ご自身で利用された登山靴やアイゼン等と共にご寄贈頂いた金剛杖です。（八角形、石突金具あり。全長　148・7㎝、握り部周囲10・2㎝、重量　483g）この金剛杖には自らが買い求めて使用を始められた年代と、登山に終止符を打つ事を決意された年が墨書でしたためられております。そこには「自昭和四年　宮澤正憲使用　金剛杖」とあり、宮澤氏の生年が大正4年ですから、14歳のときにこの杖を買い求め、「至平成元年」の年、すなわち75歳まで、この間61年に亘ってこの杖を登山の伴侶として傍らに携えていたものであります。ちなみにこの金剛杖は有明駅前で購入されたということです。

以下ではこの金剛杖に残された焼印を、「自昭和四年」と記された面を仮に第一列目として、時計回りに見ていきたいと思います。なお焼きが回り過ぎ、字の判読が困難なものには□にて記載致します。

一列目上から「自　昭和四年　宮澤正憲使用　金剛杖」の下から、「大天井岳」「□□□□□山」「大槍小屋」「白□□湯」「吹拂千丈ヶ原」「□ヶ岳頂上」「槍沢大雪渓」（以上七ヶ所）

二列目は「柏」「常念岳頂上」「常念山脈縦走」（以上三ヶ所）

三列目「乗鞍肩ノ小屋」「上高地登山」「常念小舎」「赤沢岳」「□立山小□」「一の俣小屋」（以上六ヶ所）

四列目「至平成元年」の下には、「信濃四ツ谷口」（以上一ヶ所）

五列目「中房温泉」「ヒダ乗鞍岳一万尺権現池」「槍岳頂上」「槍沢小屋」「乗鞍天然亀甲」「□立山小□」（焼きがあまく三列目の同様のものの失敗作と思われる）「槍沢ヒユッテ」（以上七ヶ所）

六列目「□□岳登山」「乗鞍山頂上」「□□沢小や印」「横通岳」「白馬岳」「□□頂上印」「槍岳大雪渓」（以上七ヶ所）

七列目「白馬岳頂上」「東天井岳」「殺生小屋」「乗鞍鶴ヶ池」「巡乗鞍冷泉」「山川荘」（以上六ヶ所）

八列目「巡□□□□□白骨温泉」「槍ヶ岳肩の小屋」「上高地」「□□□□□山」（一列目の失敗作と思われる）「有明山」（以上五ヶ所）

以上のとおり、合計36の焼印が押印されています。

〈写真1〉金剛杖全体写真

〈写真2〉白馬岳の焼印

〈写真3〉信濃四ッ谷口の焼印

〈写真4〉有明山の焼印

山小屋における焼印の習慣

このように北アルプス周辺の山頂の山小屋や神社、そして麓の登山口、旅館や温泉地において焼印が行われていたことがわかります。現在の富士山の例のように焼印に年号が押されているものはなく、かつては版型を毎年変える必要のない、何年にもわたって使える名称だけのものが一般的であったことがわかります。この中で登山小屋の開業が古いものには白馬岳に登山用石室（明治40年）があり、これを嚆矢として徐々に山小屋が建設されていきますが、実際には一般の登山客が増加してくる大正頃から徐々にこうした焼印の習俗が山に持ち込まれたと推察されます。もっとも講などで一般の信者がそれ以前から登られている乗鞍や有明山などは、既にそうした焼印の習慣があるやも知れず、それが次第に一般の登山小屋にも利用されるようになったのか、この間の山小屋における焼印の始まりや伝播経緯については、今後の課題として大方のご教授をお願い致します。

なお博物館には他にも焼印のある金剛杖があり、なかにはピッケルに押印されている事例もあります。

こうした他の事例も今後検討し、あわせて大町周辺では對山館主人であった百瀬慎太郎によって考案されたとする金剛杖に荷杖の突起のような金具を付けた、いわゆる「大町杖」（峯村隆氏より教示）も繁用されており、これらにも焼印が残されている可能性があり、お手持ちの杖がありましたらご紹介を頂けたらと思います。

金剛杖は、本来、僧侶や修験者が修行のために山岳抖擻の際に使用する木製の杖として、修験十二道具の一つに数えられているものです。現存するものでは、近世後期を遡る遺物は残されていない状況の中で、これが一般の信者の登拝に利用され始める時期は実際にはいつ頃まで遡り、また登頂を記念して押印された焼印の習俗とどの時期に結びつくのか、山岳文化を考える上で興味は尽きません。

おわりに

金剛杖に押された焼印は、自らの登山暦を思い起こし、他人には計り知れない思い入れがあるに違いありません。富士山などには各合目ごと山室に焼印があり、積み重ねた苦労の証として焼印はいつまでも標（しるし）として残され、後に振り返って達成感を感じさせるなによりのものであろう。北アルプスにおける焼印の文化が、再び金剛杖とともに復活すれば、登山者にとって励みとも記念ともなるに違いない。かつてそれを楽しみに山に登った宮澤氏のように。

（注1）元教員としてご活躍し、退職後長野県山岳総合センターに4年間勤務。平成6年には近代文藝社より『人生登山七十年』を発刊し、晩年は生家の池田町より移転し名古屋において逝去された。

（山岳博物館学芸員）

山岳博物館オフィシャルホームページ
―「博物館ならでは」を目指して―

千葉　悟志

山岳博物館では、平成10年11月22日からホームページを通じて、企画展や特別展、イベントの紹介をはじめ、学芸員や飼育員がホットな話題をみなさまにお届けしています。

ここでは、博物館ホームページならではのページについて少しご紹介いたします。

「北アルプスの四季」

◆現在の北アルプス

まず、何と言っても博物館の誇るものは、北アルプスの眺望です！これはマネをしたくても絶対にできない、立地を生かした「芸術」をご覧いただくことができます。晴れていても曇っていても雪が降っていても、この景色を見ると「美しい」と感じてしまうのは職員だけではないと思います。その素敵な景色を直接ごらんいただけない方のために、ご案内したいのが、3階展望室の屋根に設置されているライブカメラからの映像です。クリックすれば、好きなときにいつでもご覧いただくことができる優れものです。今年ライブカメラがリニューアルされ、さらに見やすい画像が提供されています。たくさんの方がアクセスされていて人気の程が伺えます。ここまで宣伝いたしましたが管理は、大町市情報センターで行われています。

「なるほど北アルプス画像館」

◆北アルプス大観望

そして、朝昼夕と刻々と移り変わる景色を3階展望室からお届けしているのが『今日の北アルプス』です。学芸員と飼育スタッフが、勤務時間にとらわれずに「今日のこの瞬間が最高！」という景色を逃さず、毎日ご提供しています。ですので、日に何度か画像が入れ替わったり、画像が増えていたりするのはそのせいです。東京在住の方から「毎日楽しみにしています」という昨年のお年賀は、毎日の更新の励みとなりました。

「付属園」

◆アニマルウォッチング

博物館では付属園という場所で動物を飼育しています。『今日のアニマルウォッチング』では、飼育スタッフにしか撮影できない表情やしぐさをご覧いただくことができます。コメントもおもしろいですよ。市内小学校の児童のみなさんも更新を楽しみにアクセスしてくださっているそうです。こちらも毎日、更新し続けています。

「付属園」

◆オタリ親子の観察日記

昨年、平成16年に北安曇郡小谷村（長野県）で保護された「オタリ」（メス）と、同年に同郡白馬村で保護された「ハクバ」（オス）との間に1頭の子が産まれました。「オタリ」は初めての出産で、子どもの頃から世話をしてきた飼育スタッフに見守られながら無事に出産。そこからオタリの初めての子育てが始まりました。

ここでは飼育スタッフの目を通してみた、子どもと母親オタリの成長が綴られています。現在、21話を迎えました。

「研究・報告書」

◆山岳文化研究会

「山岳」をテーマに、北アルプスの登山史や地形・地質・雪形、また現在の登山が抱える課題、自然保護などに関わる広範な人物・自然科学といった学問を横断して、故郷に学びながら、地域を考え、お互いに学習を進めているのが『山岳文化研究会』です。

将来はここで培われた成果を博物館の展示に反映し、実際に展示を自分たちで構成して作り上げていくことを目標としています。

例会は毎月の中頃、午後6時～8時頃まで行っています。この例会の模様をホームページで紹介しています。暖かくなったら随時博物館から飛び出て現地見学も実施していきます。山の好きな方ならどなたでも会員募集中です。

「研究・報告書」

◆大北地域の湿地植物の生活史研究グループ

湿地に恵まれた大町を中心とした大北（だいほく）地域を代表する草本類10種を対象に、居谷里湿原（いやりしつげん）や唐花見湿原（からけみしつげん）などで観察をするグループです。発芽～開花する大きさになるまでの生活史や、何時ごろ開花して、どのように結実しているのかなどの開花・結実様式の観察、またどのような生物と関係を持っているのかなどをつきとめ、平成23年度の企画展で成果を発表することを目標に活動しています。

ここでは毎月1回の勉強会についてご紹介しています。

ホームページを立ち上げてから10年が経過し、これまでに色々な情報をみなさまにお届けして参りました。博物館では、今後もさらに地の利を生かした博物館ならではの情報発信を計画していますので、ぜひ、アクセスしてみてください。

アドレス
http://www.city.omachi.nagano.jp/sanpaku/

（山岳博物館学芸員）

山と博物館　第53巻　第4号
二〇〇八年四月二十五日発行
発行　〒398-0002　長野県大町市大町八〇五六－一
市立大町山岳博物館
TEL　〇二六一－二二－〇二一一
FAX　〇二六一－二二－二二三三
E-mail:sanpaku@city.omachi.nagano.jp
URL:http://www.city.omachi.nagano.jp/sanpaku
印刷　有限会社　北辰印刷
定価　年額　一、五〇〇円（送料含む）（切手不可）
郵便振替口座番号〇〇五四〇－七－一三二九三

R100　PRINTED WITH SOY INK　この「山と博物館」は再生紙を使用し、石油溶剤の代わりに大豆油を使用した大豆インキで印刷しています。